

114 明治14年2月1日 菊池長閑宛

第一号 明十四二月一日

此度決心したる義二ヶ条あり第一ハ容易の訳柄てハ冬時分盛岡
に下らぬ事第二ハ通し車に乗らぬ事なり東山道の冬旅は実に難
渋なるものにて中にも榛原吉岡長嶺の寒風越河奈須野ヶ原の降
吹白河山中の夜行は死迄忘へくも思はれず積雪ハ東京に入迄多
少あり十日の長旅中雪降に逢たる事半に過たりと覚ゆ車夫ハ骨
折ぬに非ず心を用て世話セぬ非され共何分日々日一抔車を引又

明日も率ねは成らぬと云ふ恐ある故道ハ抄取す此様な寒い旅は
一日も短めたいと思へいとゞ車の行事遅き様に見え車の上
にて気を操計りも並々の苦てハなし如何に路か悪いと云何程途
にて暇か費たとハ云仙台迄四日振にて漸々着れた時には其所よ
り直に車夫に暇を遣ふかと思たれ共約束ハ約束なれハ仕方かな
く且仙台より先ハ路か抄取へしと車夫の云ふに任せ連行たるに
案外雪か深く遂々十日風雪に曝されたりア、蒸気車ならば蒸
気船ならばと毎日の様に思たり盛岡を立し日は花巻昼食にて黒
沢尻に至り暮に最早五時なれば金ヶ崎迄は六かし且金ヶ崎にハ
可然旅宿なけれハ何卒一泊し呉る車夫の頼ニ任せ黒沢尻に宿り
たり此所にて瓜籠を買翌朝より右を穿て旅行セリ翌朝早立にて
榛原に掛りける時曉風の寒さは実に骨に徹ると云ふ程にて路
もなき様な所を除々と通りたり此日ハ連の者を待たる為漸々一
の関に届たり爰迄は福島小太郎と同道セしかは旅の憂も忘れ
たるか翌日より独旅なれば途中ハ勿論宿屋に着ても退屈限りな
く西洋の宿屋にハ少く共其地の近辺の新聞紙を備置客の一覽
を許すなれ共東山道の宿屋にハ右の如き氣の聞たる設なき程に
何か考へ様と思ても都合よく題も続かねは仕方なし何か早速出
来ずに慰となるものもや有んと考見たるに詩ハ韻字平仄も定か
に覚ねは中々容易く出来へくも思はれす此こそ可然と決定し夫
より日々車上宿屋の嫌なく気さえ向は風流の人と化下牛の長工
夫に時を過したるに中々退屈凌となりてよかりし爰に一二を記
して笑草に供んハ金石より盛岡に赴く途中頃ハ正月三ヶ日の内
なれ共村々ハ物静にて些とも平日に変わる事なく只戸長の家杯に

門松の見るのみなれば皚々白雪擁千峯巖改山村今尚冬農俗竟難
染新曆戸長独樹飾門松と口吟みたり古川駅に往時分なりしか長
嶺を通る節風のいと寒吹けれハ早看行松樹影長風威雪復倍揚々
電線亦以苦寒烈如恨如愁鳴夕陽と詠したり同駅の端にて絞付の
覆を掛た長持箱三挺長棒の駕籠一挺人力車二三輪昇者引者等皆
桃色の手拭を蒙りて行列をなし来る者ありけれハ何か華族の老
人杯か旅行するならんと思の外嫁遣たと云ふ話なれば長筐三四
二三車輿後輿前歴陣斜昇丁裏頭手巾赤不知新婦嫁誰家と遣たれ
共此は下作中の下なるものにて甚可笑しけれ共記す又韻字か少
し怪しけれ共昔の様と変たる事を水村山郭浴文明事々今多脱旧
粧田畔影高伝信柱店頭色緑受翰箱津舟没跡橋坡出寺宇變為小学
費人力車飛十余里竟無客僱昇夫行と作りたり追々通行の村駅に
警察官の出張所ありてそれ而已西洋風ニ造り余の家屋敷に較ぶ
れハ立派に見え其村や駅に不相応にも不釣合にもあるか如くな
れハ矮屋茅檐鄰又鄰一村畢竟属賤貧粉牆緑戸玻璃甍警察吏衙樓
独新と吟したり仙台より立たる折藤田迄参る積なりしか初夜越
河に掛りし時雪降出し山嵐の勅敷吹来て目も開れず人も車と共
に谷底に吹落れん勢にて実に恐敷夜嵐となり新雪も余積て車の
引悪事夥しけれハ逐に越河に泊けり此所ハ山中なれハ魚といへ
ハ塩鮭の臭いものならてハなく滅多に泊り客のない所と見え宿
屋の体裁も至て悪く風の為風呂ハ立兼との断りにて車夫共ハ湯
にも入事出来す甚た込入たり翌朝も昨夜の降積雪の為余程難渋
して藤田に出たり矢吹に至りし頃ハ日既に暮果泊ふと思しに宿
屋の好分は皆塞たり仕方なしに白河迄押行ける途中より大雪に

降れ路普請の為半里余の廻り道をして夜十一時頃漸々柳屋に着
けり越堀より太田原に往途中大風雪にて眼も開れず車も吹倒さ
れん様なりし故又もや縄引一人雇三人にて引セけるに其寒き事
ハ実に咄に尽し難かりし東京に着する日も栗橋より雪に降られ
けるか長降ならざりけれハ路も抄取夜十時過東京に入たり日焼
の為下女に見紛れる位色黒くなりて帰りけれハ役所に出ても雪
の中から出て来たから白く成て来そうなものに迎大に笑はれた
り忠兵衛に逢て此度ハ斯々の訳にて古金ハ持来ぬと云たれハ夫
ハ誠に残念た今売ないと云方かないから半分なり共金禄公債証
書に換置たら可然と添慮せり其後市況を覗に公債証書ハ追々直
段登る様に相見れハ今一応為登方工夫ありてハ如何当地ハ追々
春暖の氣候に越たり登京の砌友人の宿所書留たる薄葉の横本一
冊并物を結付て持歩行に用る革細工取紛れて忘れ参たれハ序に
送り被下たし皆様によるしく

父君

武夫

去二日に代言人試験委員と云ふものを云付られ其方をも兼動し
て居る